

らざる人、一旦はげみてさきをかくる、かならず死ぬる事かくのごとし、くらふところのもの、はらの中に入らずして、喉にとゞまる、臆病の者なりとぞいひける、

〔平治物語二〕待賢門軍附信頼落事

大宮表ニハ平家ノ赤旗三十餘流差舉テ、勇進メル三千餘騎、一度ニ関ヲ咄ト作リケレバ、大内モ響渡テ夥シ、颯波ニ驚テ、只今マデ由々敷見ヘラレツル信頼卿、顔色變テ草葉ノ如クニテ、南階ヲ被下ケルガ、膝振テ下兼タリ、人ナミクニ馬ニ乗ラント引寄セサセタレ共、フトリ責タル大ノ男ノ大鎧ハ著タリ、馬ハ大キ也、乗ハヅラフ上、主ノ心ニモ似モ似ズ、ハヤリ切タル逸物ナレバ、ツト出ント出ムトシケルヲ、舍人七八人寄テ馬ヲ抱ヘタリ、放タバ天ヘモ飛ヌベシ、穆王八足ノ天馬ノ駒モ角ヤト覺ユル計ニテ、乗カテ給所ヲ、侍二人ツト寄テ、疾召候ヘトテ押揚タリ、餘リニヤ押タリケン、弓手方ヘ乗コシテ、伏様ニドウト落ツ、急引起シテ見レバ、顔ニ沙ヒシト付、鼻血流テ見苦カリケリ、

〔古今著聞集^{十六}興言利口〕中比六のあしげといふあがり馬有けり、いづれの御室にか、大法をおこなはせ給ひけるに、引せられにけるを、ある房官に給はせてけり、あがり馬ともしらで乗ありきける程に、有時京へ出けるに、知たる人道にあひて、此馬を見て、いかにさしものあがり馬の名物、六のあしげには、かく乗給へるぞといひたりけるに、おくしてたづなをつよくひかへたりけるに、やがてあがりて、なげゝるに、てんさかさまに落て、かしらをさんぐにつきわりにけり、おかしかりける事也、

〔明德記^中〕上原入道ト申老武者アリ、引ケル御方ニ半町バカリ先立テ、猪熊ヲ上ニ一條マデ逃タリケルガ、馬ノ足音時ノ聲耳ニ付テ、乗タル馬ノ三ツノ上ニ聞エケレバ、敵ガ近付タルゾト心得テ、相國寺ヲサシテ馳行ケリ、惡黨亂入ノ爲ニ、相國寺ニハ總門ヲ差堅メテ、行者仁供大勢ニテ門